もの丶ぐして、出向てこと葉たゞかひをしけり、海賊が船に幕引まはして、たてをつきて、其中に惡徒等其數多く有、しばし詞たゞかひして、上座まづひきめもて海賊を射たるに、海賊くゞまりて箭を上へとをしけり、ひきめ耳をひゞかして通ぬれば、則立あがる所を、いつのまにか矢つぎしつらん、じんどうをもてたちあがる目のあひを射て、うつぶしにいふせてけり、此矢つぎのはやさに海賊らおどろきて、是は誰にておはしまし候ぞと問たりければ、汝らしらずや、正上座行快ぞかしと名乘て、此邊の海ぞくは定て熊野だちの奴原にてこそ有らめと思へば、優如してこれをもて手なみをば見するぞといひたりけるに、海ぞく等さらば始よりさは仰られで、希有にあやまちすらんにとて、こぎかへりにけり、

〔北條五代記九〕戰船を海賊といひならはす事

見しは昔、北條氏直と、里見義頼、弓矢の時節、相模安房兩國の間に入海有て、舟の渡海近し、故に敵も味方も兵船おほく有て、たゝかひやん事なし、夜るになれば、或時は小船一艘二艘にてぬすみに來て、濱邊の里をさはがし、或時は五十艘三十艘渡海し、浦里を放火し、女わらはべを生捕、卽刻夜中に歸海す、島崎などの在所のものは、わたくしに、くわぼくし、敵方へ貢米を運送して、半手と號し、夜を心やすく居住す、故に生捕の男女をば、是等のもの、敵方へ內通して買返す、去程に、夜に至れば、敵も味方も海賊や渡海せんと、浦里の者ふれまはつて用心をなし、海賊のさた、日夜いひやむ事なし、今は諸國をさまり、天下泰平四海遠浪の上までもをだやかにして、靜なる御時代なり、然其兵船おほく江戸川につなぎをき給ふ、ある人いくさ舟の侍衆を海賊の者と云ければ、其中に一人此言葉をとがめていはく、むかしより山賊海賊と云ふ事、山にあつて盜をなし、舟にて盜をするものを名付けたり、文字よみも玄かなり、侍たるもの丶盜をする者や有、海賊とは言語道斷曲事かな、物をも玄らぬ木石なりといかる、此者聞て、我文盲ゆへ、文字よみも玄らず、扨て舟